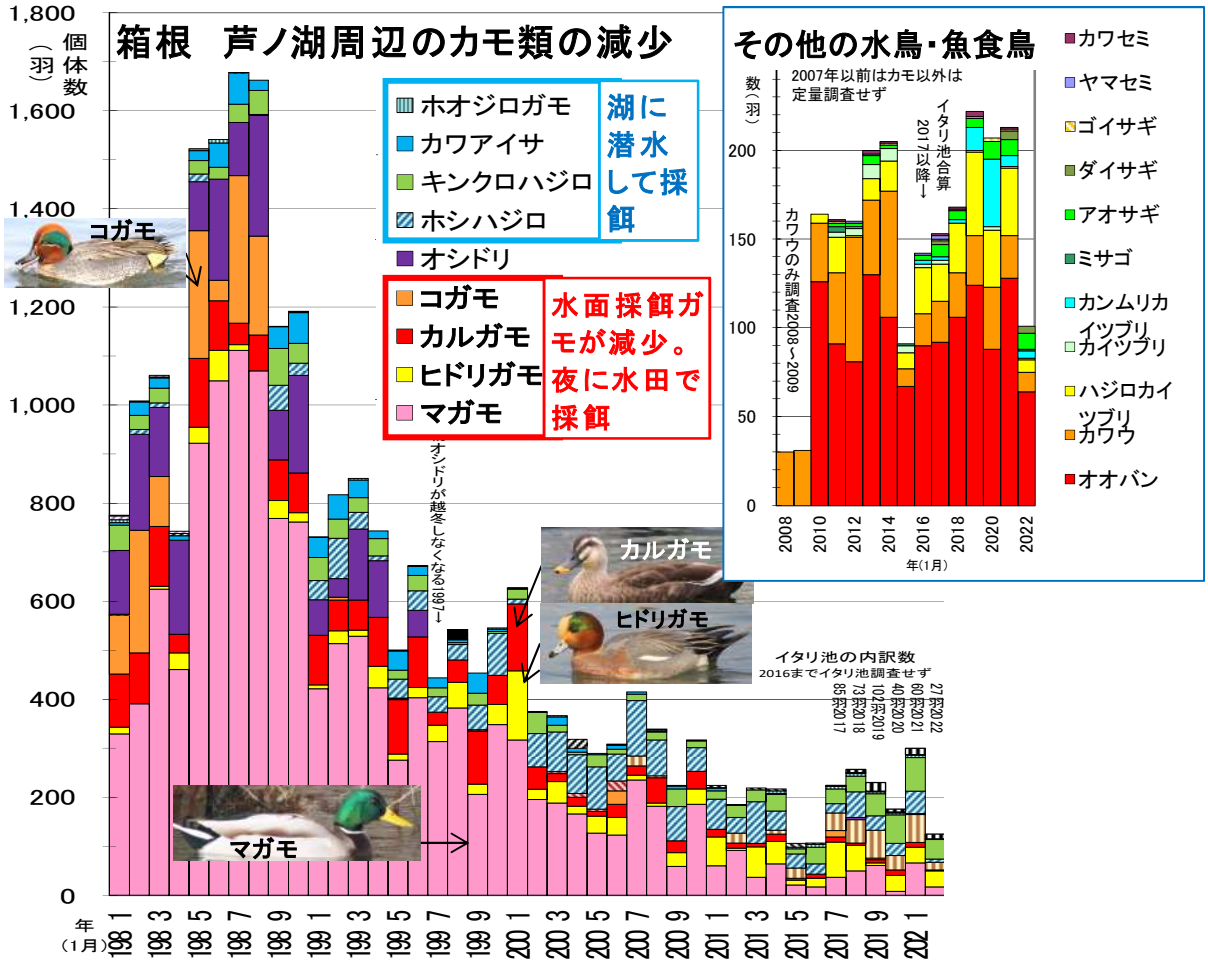
足柄地域の“冬みず田んぼ”の活動　連載第 42 回

芦ノ湖の水鳥の経年変化、身近なカモの激減(1)

神奈川支部会員、あしがら冬みず田んぼの会　会長　伊豆川哲也



箱根芦ノ湖や酒匂川で激減してしまったカモを復活するために、冬の餌場が再生できないかと思い始めた冬みず田んぼ（冬期湛水）の普及活動。田んぼの生き物と農業との両立を目指そう。

■１.芦ノ湖の水辺の鳥の経年変化

今冬も野鳥の会支部のガンカモ調査で芦ノ湖とその近くのイタリ池で水鳥カウントをしました（伊豆川、原田、他）。

芦ノ湖ではカワウもカイツブリ類もアイサ類も同じワカサギを食べてますし、オオバンもヒドリガモも岸辺に植栽された芝生を食べてます。

このためカモ類だけでは水辺の環境変化を把握するには不十分だと思い、芦ノ湖では 2010 年以降、カモ類調査時に同時に記録できる全水鳥（ミサゴ、カワセミ科、サギ科、カイツブリ目、カワウ、オオバン等）をカウントしてます。

イタリ池は芦ノ湖の約 1km 北にある池で水鳥が芦ノ湖と往復しているようなのでグラフでは合算しました。

ご覧の通り、カモ類は明らかに減少してます。その中でもマガモ、カルガモ、コガモといった水面採餌ガモ類が特に減少してます。（次号につづく）。

契約栽培農家募集中
環境に関心がありそうな県西の農家さんをご紹介ください。農家さんから冬みず田んぼ米を慣行米の相場より高額で買取りし、ブランド販売することで経済的な持続を目指します。
www.facebook.com/fuyumizutanbonokai
伊豆川哲也 izkw_tetsuya@yahoo.co.jp

足柄地域の“冬みず田んぼ”の活動　連載第 43 回

芦ノ湖の水鳥の経年変化、身近なカモの激減(2)

神奈川支部会員、あしがら冬みず田んぼの会　会長　伊豆川哲也

箱根芦ノ湖や酒匂川で激減してしまったカモを復活するために、冬の餌場が再生できないかと思い始めた冬みず田んぼ（冬期湛水）の普及活動。田んぼの生き物と農業との両立を目指そう。

（5 月号の続き。5 月号掲載の芦ノ湖のカモ類経年グラフと合わせてご覧ください）

■芦ノ湖の水面採餌カモ類の減少

グラフでのカモの種類を採餌タイプで 2 つに分けました。凡例の暖色系統（赤～黄色）はマガモ、カルガモ、コガモ等で水面採餌カモといわれます。一方、凡例の青系統は、ホシハジロ、キンクロハジロ、カワアイサ等で潜水採餌カモといわれます。

水面採餌カモは、脚の前後位置が腹の中央近くにあるので、陸での重心バランスが良いので歩くのが得意ですが、逆に潜水が苦手です。このため冬の水田の水溜まりや河川の浅い岸辺で夜間採餌し、日中に湖沼や大河川で浮いて寝ることが知られています。

芦ノ湖でも、日没頃に水面採餌カモが飛び立ち採餌に出かけ、御殿場や足柄平野の水田地帯まで行くようです。そして明け方に芦ノ湖に戻ってきます。毎晩の飛翔ルートは、飛翔エネルギーを最小限にするコースを取るので、箱根外輪山の峠を越えて往復します。

芦ノ湖の船上から静岡側を見た時の稜線の一番低いところが湖尻峠。峠越えのカモ類をねらった鴨猟が 1969 年まで行われていた。

この行動パターンを利用して、箱根外輪山の鞍部では明け方、鴨猟が行われていました。なお、1969 年に国立公園の保護区の拡大により禁猟となりました。

かつては、猟ができるほど多くのカモがいて、それを養える程の餌場となる水田の水溜まりがあったということなのです。しかし、この約 30 年間の圃場整備工事による排水性向上で、冬に水溜まりが残る水田は激減しました。つまり、カモの餌場が激減したのです。

これに呼応して、芦ノ湖では、水面採餌カモが 1000 羽以上いたのが、年々減少し 100 羽程度になってしまいました。

鳥だけで無く、水田の水溜まりや湿った泥で越冬していた、カエルやドジョウ、トンボのヤゴやタイコウチなども激減しました。

マガモ、カルガモ、コガモ等は、県内の水辺で、最も普通に見かけるカモです。このため、もしも芦ノ湖で絶滅しても、干潟や河川にもいますので、県内絶滅はしないでしょう。危惧しているのは、絶滅するかどうかではなく、猟ができるほど普通にいた動物が、生息できなくなってしまうほど、水田環境は、生態学的に劣化してしまったということです。

水田の圃場整備の主な内容は、排水暗渠を埋設する排水性向上です。トラクター（田植え前に耕耘します）やコンバイン（乗用型の大型稲刈り機）などの大型の農機具を走らせるためには、土を乾かしてタイヤが埋まらないようにする必要があるのです。大型機械の普及に伴い、圃場整備工事が進み農業生産性が向上し、生物多様性が低下しました。里の野生生物は産業としての農業に強く影響を受けるのです。

www.facebook.com/fuyumizutanbonokai
伊豆川哲也 izkw_tetsuya@yahoo.co.jp
090-4963-8860

足柄地域の“冬みず田んぼ”の活動　連載第 44 回

芦ノ湖の水辺の鳥の経年変化、オシドリ１万羽はいずこへ？(1)

神奈川支部会員、あしがら冬みず田んぼの会　会長　伊豆川哲也

箱根芦ノ湖や酒匂川で激減してしまったカモを復活するために、冬の餌場が再生できないかと思い始めた冬みず田んぼ（冬期湛水）の普及活動。田んぼの生き物と農業との両立を目指そう。

（5 月号掲載の芦ノ湖のカモ類経年グラフと合わせてお読みください。）

オシドリ雄　早川渓谷　塔ノ沢 2019/1/5

■１.芦ノ湖のオシドリの変遷

芦ノ湖では、昭和初期にはオシドリだけで 1 万羽いたとされますが、現在、オシドリは芦ノ湖には定着していません。

芦ノ湖のオシドリの変遷と保護運動については、文庫本（田代道彌 1990）に詳しく書かれているので、変遷を以下に紹介します。

戦前の 1937 年(昭和 12 年)に芦ノ湖南岸の元箱根だけで 3000 羽もオシドリがいたとされ、「関東ニ於ケル最大ノ群集地」(日本鳥学会誌 1938 年)と掲載されました。地元の方の話を総合すると、芦ノ湖で当時、約 1 万羽と言われます。

戦後しばらくは、アメリカの進駐軍が、冬になると毎日のように鉄砲でオシドリ猟をしていたとのこと。美しい羽色なので剥製にしたのでしょう。鉄砲の音で相当数が他地域へ飛去してしまったと思われます。

その後、進駐軍が来なくなり、著者の田代氏が舟でカモカウントを始めた 1952 年は湖全体で 50～60 羽まで減っていたそうです。

しかし発砲音がなくなったせいか、毎年少しづつ増加し 1962 年頃には 350～500 羽まで回復し、その後、また減少したそうです。(出典：田代道彌 1990「サルのざぶとん」神奈川新聞社　文庫本)。

■２.船舶で徐々にオシドリ減少

オシドリが 1962 年以降、年々減少した要因としては、船舶レジャーや、餌場である森の植林地化が推定されます。

1911 年に伊豆箱根鉄道による遊覧船が就航し、長年、運航されていましたが、オシドリは 1962 年頃には 350～500 羽まで回復したということは、当時の運航本数や航路は、西岸の入り江に隠れているオシドリが逃げるほどでは無かったようです。

しかし、1964 年に箱根観光船(株)が就航させた海賊船ふうの大型遊覧船が圧倒的な人気で、その後も運航本数を増やしました。

また時代は高度経済成長期（1955 年頃～1973 年頃）で、レジャーとしての釣り船やスワンボート（コブハクチョウ型の小舟）も盛んになったようです。

このためオシドリにとっては入り江で安心して休息ができなくなり、個体数が減少したようです。

その後の 1981 年以降は、本誌 5 月号のグラフの通りで、1981～1994 年は約 100～200 羽のみとなっています。しかし越冬数としては安定していました。

ところが、1995 年に急に 2 羽となり、翌年に 54 羽まで回復したが、結局 1997 年以降、芦ノ湖では、ほぼ越冬しなくなってしまいました。

つまり 1995～1997 年の間に、なんらかの相当強い障害が起きて越冬しなくなってしまったと推定されます。(つづく)

伊豆川哲也 izkw_tetsuya@yahoo.co.jp
090-4963-8860
www.facebook.com/fuyumizutanbonokai

足柄地域の“冬みず田んぼ”の活動　連載第 45 回

芦ノ湖の水辺の鳥の経年変化、オシドリ１万羽はいずこへ？(2)

神奈川支部会員、あしがら冬みず田んぼの会　会長　伊豆川哲也

箱根芦ノ湖や酒匂川で激減してしまったカモを復活するために、冬の餌場が再生できないかと思い始めた冬みず田んぼ（冬期湛水）の普及活動。田んぼの生き物と農業との両立を目指そう。

（7 月号の続き。5 月号掲載の芦ノ湖のカモ類経年グラフと合わせてお読みください。）

オシドリ雄　早川渓谷　塔ノ沢 2019/1/5

■３.居なくなってしまった理由は？

オシドリは、夜間に林床で堅果（いわゆるドングリ）などを採餌します。芦ノ湖は箱根外輪山に囲まれていますので外輪山のブナ、ミズナラ等の堅果が餌となっていたのではないかと推定されます。

田代道彌氏による調査でも、オシドリは日没頃に、他のカモ類と一緒に芦ノ湖を飛び立ち、夜明け頃に戻ってきていました。

外輪山の植生は、オシドリが急に居なくなった 1995～97 年だけで、急激に伐採されたとは考えられないので、植生（餌場）の変化が居なくなった直接的な要因では無いようです。

一方、日中の休息地の観点から考察すると、オシドリは警戒心が強いため、湖岸の樹木が水面に覆い被さり、上空の外敵からも見えない入り江で日中に休息しています。

芦ノ湖では、釣り船の増加と大型遊覧船の便数増加により、オシドリの休息環境は悪化したと推定されます。しかし、遊覧船や釣り船は 1995～97 年に急に増えた訳でもありません。実は、急に居なくなってしまった要因は、不明なのです。

■４.どこへ行った？

では、減少したオシドリは、どこへ行ったのでしょうか？

移動したのか元々居たのかは不明ですが、芦ノ湖を水源とする早川渓谷で、今でも数十羽が毎年越冬しています。

また、一部は、どうやら、芦ノ湖から、山北町の丹沢湖（三保ダム、1979 年に完成）へ越冬地を変え、その後、さらに新しくできた東丹沢の宮ヶ瀬湖（宮ヶ瀬ダム、2001 年運用開始）へ主要な越冬地を移動したようです。

宮ヶ瀬湖は、近年、県内で最大のオシドリ越冬地になっています。年変動はかなりありますが、毎年、約 100～約 1000 羽が越冬しています（出典：青木、秋山、藤井 2019BINOS 野鳥の会神奈川支部）。

■５.湖でのオシドリ観察のコツ

オシドリは警戒心が強いので、見つけるにはコツが必要です。

丹沢湖でも宮ヶ瀬湖でも、深く入り込んだ入り江の一番奥で、樹木が水面を覆っている場所で、群で日中休息をしています。

このため対岸から、入り江の奥を入り江毎に望遠鏡でじっくり探すと見つけやすいです。

それも、水面だけでなく、岸壁にへばりついて休憩している個体も多いです。

水面ではオシドリのオレンジや茶色は目立つのですが、冬の岩を背景にすると、落ち葉に紛れて、意外と保護色となり、目立たないのです。（つづく）

伊豆川哲也 izkw_tetsuya@yahoo.co.jp
090-4963-8860
www.facebook.com/fuyumizutanbonokai

足柄地域の“冬みず田んぼ”の活動　連載第 46 回

芦ノ湖の水辺の鳥の経年変化、オシドリ１万羽はいずこへ？(3)

神奈川支部会員、あしがら冬みず田んぼの会　会長　伊豆川哲也

箱根芦ノ湖や酒匂川で激減してしまったカモを復活するために、冬の餌場が再生できないかと思い始めた冬みず田んぼ（冬期湛水）の普及活動。田んぼの生き物と農業との両立を目指そう。

（8 月号の続き。5 月号掲載の芦ノ湖のカモ類経年グラフと合わせてお読みください。）

オシドリ雄　早川渓谷　塔ノ沢 2019/1/5

■６.早川渓谷で今年も越冬してた

オシドリは芦ノ湖では越冬しなくなってしまいましたが、箱根の早川渓谷で越冬個体を時々見かけます。早川は渓谷が深く水面が見える道も少ないため探すのはなかなか難しいですが、塔ノ沢～出山鉄橋では、毎年数十羽が越冬しており、2022 年 2 月にも出山鉄橋下流で 14 羽を確認できました。

岸壁にへばりつくオシドリ（○印）。
獣が近寄れない急斜面での休憩が多い。鮮やかなオシドリの色が意外にも枯葉に溶け込んで保護色となる。
箱根町　早川渓谷の出山橋下流 2019/1/12

観察ルートとしては、函嶺洞門にトイレと無料駐車場があるので、そこから早川沿いの国道を芦ノ湖方面に向かって歩くのがお勧めです。すると所々、旅館へ行くための小さな橋があり、渓谷を見渡せますので、双眼鏡でチェックします。

また国道からも所々、枝越しですが渓谷を見下ろせる箇所が少しあるので、双眼鏡でチェックします。

オシドリが越冬する出山（でやま）鉄橋（箱根登山鉄道）

■７.早川渓谷で繁殖しているかも？

本州で繁殖しているカモと言えば、カルガモが有名ですが、実はオシドリも繁殖しています。オシドリの繁殖地は北海道から九州までと広く、山間部の河川近くの樹林地の樹洞で営巣します。

また、県内ではオシドリは冬鳥ですが、県内で１回だけ、繁殖記録（1984 年夏、芦ノ湖で雛連れの親鳥を発見）があります（田代道彌 1990）。

これらより、早川渓谷で、ひょっとすると人知れず夏に少数が繁殖しているかもしれません。こんな期待をしながら夏でも涼しい早川渓谷を眺めに来てはいかがでしょうか？

見つけたら教えてください。（つづく）

伊豆川哲也 izkw_tetsuya@yahoo.co.jp
090-4963-8860
www.facebook.com/fuyumizutanbonokai

足柄地域の“冬みず田んぼ”の活動　連載第 47 回

芦ノ湖の水辺の鳥の経年変化、オシドリ１万羽はいずこへ？(4)

神奈川支部会員、あしがら冬みず田んぼの会　会長　伊豆川哲也

箱根芦ノ湖や酒匂川で激減してしまったカモを復活するために、冬の餌場が再生できないかと思い始めた冬みず田んぼ（冬期湛水）の普及活動。田んぼの生き物と農業との両立を目指そう。

（9 月号の続き。5 月号掲載の芦ノ湖のカモ類経年グラフと合わせてお読みください。）

オシドリ雄　早川渓谷　塔ノ沢 2019/1/5

■８.オシドリの県内繁殖記録

本州で繁殖しているカモと言えば、カルガモが有名ですが、実はオシドリも繁殖しています。オシドリの繁殖地は北海道から九州までと広く、山間部の河川近くの樹林地の樹洞で営巣します。

また、県内ではオシドリは冬鳥ですが、県内で１回だけ、繁殖記録(1984 年夏、芦ノ湖で雛連れの親鳥を発見)があります(田代道彌 1990)。

■９.オシドリの保護増殖運動

田代氏や室伏友三氏らによる、芦ノ湖のオシドリを留鳥化させて繁殖させようという運動は、その後発展し、1964 年頃から箱根町の町営事業にもなりました。

事業は３本立てで、巣箱と給餌と誘引飼育でした。

オシドリは樹洞営巣なので、人気の無い西岸の樹林地に 1953 年以降、多くの巣箱を設置し、利用痕跡が無いか見回りを行ったそうです。

給餌は、湖岸に給餌台を作り、ドングリを置いたそうです。ドングリ拾いは、1967 年、箱根小中学校の児童が協力してくれて、それが NHK や新聞報道もされ、関東一円からドングリが寄せられるようになったそうです。

また、芦ノ湖のオシドリは冬鳥のため、春になると渡去してました。このため、春夏の繁殖期にも芦ノ湖に居つかせようとして、その誘引のために、1964 年頃から動物園等から譲り受けたオシドリを湖岸のゲージで飼育しました。

現代ならばデゴイ(本物そっくりの鳥模型)を置いて鳴き声をスピーカーで流すのでしょうが、当時は本物をゲージ飼育して、ゲージの外の野生の越冬オシドリに、「春の繁殖期になっても仲間が居るよ」と見せつけたのです。

これらを長年続け 1984 年に、ついに雛連れの親子が、巣箱を設置した岸の近くで発見されました。

しかし、同じ頃、オシドリ雄成鳥が偶然、夏に捕獲されました。するとなんと、翼の先端の骨が切断された個体だったのです。

翼の先端の骨切断は、飼育個体では、飛んで逃げないようにするために、よく行われる手法なのです。つまり、誘因のために飼育していた個体の一部が、逃げ出してしまっていたのです。

また巣材や卵殻などの利用痕跡のある巣箱は、ついにみつかりませんでした。

すると、発見された雛連れの親は、野生のオシドリだったのか？　それとも篭脱けだったのか？　これは迷宮入りとなってしまいました。

さらに約 10 年後 1997 年には芦ノ湖でオシドリが越冬さえしなくなってしまいました。昭和初期に１万羽もいたというのに。

（出典：田代道彌 1990「サルのざぶとん」神奈川新聞社　文庫本)。

伊豆川哲也 izkw_tetsuya@yahoo.co.jp
090-4963-8860
www.facebook.com/fuyumizutanbonokai